

第3回（1981年）東方学術賞

選考委員（石田瑞麿、勝又俊教、玉城康四郎、土井久弥、中村元、水野弘元、横超慧日の七氏）のあいだで慎重に討議されました結果、今年度（第3回）の東方学術賞として、田中於菟弥、山口恵照、前田専学の三氏の業績を顕彰することに決定しました。

そうして次のような挨拶状を発送しました。

拝啓 新春の候 貴台におかれましては御清祥のことと御慶び申し上げます
さて 財団法人 東方研究会におきましては 斯学の発展を計るために真の学
問的意義あり 世の人々を益する恒久的な事業を遂行したいと兼々念願して
おりますが 本年度もインド大使館と共同主催にて 学者の秀れた業績を世に
広く顕彰することにいたしました

先般来 選考委員会において慎重審議の結果

特別顕彰として 田中於菟弥殿（東海大学教授）

学術賞として 山口 恵照殿（大阪大学教授）

学術賞として 前田 専学殿（東京大学助教授）

の学績を讃えることに決定しましたので 左記の如く 顕彰式を行ないます

一、場 所 インド大使館

東京都千代田区南九段二丁目二ノ十一（千鳥ヶ淵）

一、日 時 昭和五十七年一月二十一日（木曜日）午後三時

つきましては 御多用中恐縮ながら御来駕の榮にあずかりたく ここに
御案内申し上げます 敬 具

昭和五十六年十二月吉辰

財団法人東方研究会

理事長 中 村 元

各 位

右の案内状のごとく、1981（昭和五十七）年1月21日午後3時から東京・九段にあるインド大使館で顕彰式が行われ、メノン駐日インド大使臨席のもとにはじまりました。

中村理事長は、インド大使の祝辞のあとで、これらの方々の功績をたたえて次の演説を行ないました。

「これより受賞者のお一人お一人の功績の顕彰に移ります。

田中於菟弥先生は、わが国におけるインド文学研究の開拓者であり、その方面における最高の権威者として仰がれている方であります。インドの重要な文芸作品は、田中先生によって初めてわが国の言語に翻訳されるに至ったと言っても過言ではないでありましよう。

もちろん以前にもインド文芸の翻訳はなされておりましたが、それらは大抵英訳または

ドイツ訳からの重訳でありましたのに、田中先生はサンスクリット原典から邦訳されました。サンスクリットの研究は、わが国では悉曇（しったん）という名で千年以上前から行われ、近くは明治末期から西洋の近代的研究が導入されましたが、主として語学的・考証的研究に偏っていた嫌いあり、文芸としての美しさが見失われていた傾向がありましたが、文芸作品としての美しさを見出されたのは、田中先生の特に大きな功績であるといえましょう。

カーリダーサの作品の主要なもの

AbhijJAna-ZAkuntala, RtusaMhAra, MeghadUta を始めとして、情熱のたぎる GItagovinda, 興趣に富む Zukasaptati, DazakumAracarita その他多数の作品を邦訳され、また「インド説話集」「インド民話集」などをも刊行されています。研究論文も数多く、到底枚挙に暇がないのでありますが、その一部は「酔花集」という題名で出版されました。その題名は「花に酔う」と読むべきか、あるいは「酔うて花をめず」と読むべきか、いずれにしても、インド文芸を楽しむ先生のおすがたが良く出ていると思われまます。

お年はすでに古稀をすぎられたにもかかわらず、まことにお元気で、お見受けしたところも実にお若いのですが、つねに若い人々と談笑し、指導しておられ、後学の人々に敬慕されておられます。半世紀以上にわたってインドの文芸・文化・学問の研究と普及に尽された御活動に深く敬意を表し、ここに貴台の御功績に対し、失礼ではありますが『東方学術特別顕彰』をもっておむくい致したいと存じます。まことにおめでとうございます。

山口恵照博士は、京都大学文学部哲学科の御出身であります。京都の立命館大学で講壇に立たれ、そののち大阪大学教授として、その温厚篤実な性格を以て後輩の指導に当られ、関西というか西日本におけるインド哲学研究の一大指導者として仰がれている方です。

インド哲学全般について深い造詣をもたれ、全般的なものとしては『自我と無我』『古代インドの宗教』（共著）などがありますが、サーンキヤ哲学の研究に精魂を傾倒されました。その厳密な方法によるすばらしい成果は『サーンキヤ哲学体系序説』『サーンキヤ哲学体系の展開一究極的な転迷開悟の一』という二冊の大著となって結実したのであります。サーンキヤ哲学に関しては、以前にも諸学者の立派な研究がありましたが、体系的に独立の大著をものされたのは、博士が初めてであります。

論文も多数あり、到底列挙しつくすことはできないのでありますが、本日の顕彰式には外国の方々も多数参列しておられますので、博士が英文で書かれましたものを次に御紹介しておきましょう。

"The Problem of Dharma in Buddhism and the Dharma-Adharma in SAMkhya" I.B.K. XIII-2, 1965.

"A Consideration to 'Pratyayasarga'" I.B.K. XV-2, 1967.

"On Mukta, Deliverer and Savior" I.B.K. XXIV-2, 1976.

"On the Relation between Buddha-carita and Azrama"
I.B.K. XXV-2, 1977.

博士は近く大阪大学より定年退官されるそうではありますが、多年にわたってこの学問に精進されたその意義を高く評価し、財団法人・東方研究会は『東方学術賞』をお贈りした

いと存じます。まことにおめでとうございます。

前田専学博士は、東京大学文学部卒業後、大学院でインド哲学の研究に従事し、そのうち米国ペンシルヴァニア大学に留学し、現在は東京大学助教授で、斯界の中心的学者として活動しておられます。

夙に俊秀の誉れ高く、米国におけるインド学研究の中心であるペンシルヴァニア大学のブラウン（W. Norman Brown）教授に師事しましたが、同大学でインド建築史については世界でも最高権威と仰がれている Stella Kramrisch 女史にわたくしが会いましたときに、前田氏のことを "the best student that we have ever had!"（今まで教えたうちで最上の学生だ！）と評しておりました。その言のごとく、前田氏は同大学で PhD. の学位を得たのみならず、国際的な批判に堪え得る、高い水準の業績を示しておられます。英文の著書としては

ZaGkara's UpadezasAhasrI, Critically Edited with Introduction and Indices.

Tokyo: Hokuseido Press, 1973.

A Thousand Teachings: The UpadezasAhasrI of ZaGkara, Translated with Introduction and Notes. Tokyo: The University of Tokyo Press, 1979.

があり、また邦文のものとしては、

『ヴェーダーンタの哲学—シャンカラを中心に—』 [サーラ叢書 24] 平楽寺書店 昭和五十五年

があります。論文も多数ありますが、英文のものだけをご紹介しますと、

"The Authenticity of the UpadezasAhasrI Ascribed to ZaGkara"

(J.A.O.S., 85-2, April-June, 1965.) pp. 178-196.

"The Authenticity of the BhagavadgItAbhASya Ascribed to ZaGkara"

(W.Z.K.S.O. ,IX, 1965) pp. 155-197.

"ZaGkara's UpadezasAhasrI: Its Present Form" (Journal of the Oriental Institute, 15-3/4, March-June, 1966), pp.252-257.

"On ZaGkara's Authorship of the KenopaniSadbhASya" (Indo-Iranian Journal, 10-1, 1967), pp.33-55.

"On the Author of the MANDUkyopaniSad--and the GauDapAdIya-BhASya" (Dr. V. Raghavan's Felicitation Volume, The Adyar Library Bulletin, 31-32, 1968), pp.73-94.

などがあります。

前田博士は春秋に富み、これからの学者であります。すでに今までに外国の学者以上に高い水準の研究を完成されたことを喜び、ここに財団法人・東方研究会は『東方学術賞』をお贈りしたいと存じます。まことにおめでとうございます。

以上述べましたような趣旨でありますので、諸方面の御賛同をお願い申し上げます。

この顕彰式においては、顕彰状、金一封のほかにもインド大使館より記念の書物を贈呈されました。また本会賛助会員（株）名著普及会からは古典の復刊一揃えつつ副賞として贈

呈されました。

この顕彰式には朝野の学問、宗教、外交、教育の関係者の方々が参列し、講堂に満ちあふれ、式後に別室でパーティが行われました。